接尾語「～グチ」の一考察

阪倉篤義

(一) まえがき

卒業論文に語構成論をやりたいと思いますが、と数人の先輩方に相談したところ、それは無理だからやめた方がよい、という意見が揃って返ってきた。たしかに、その頃(昭和十年代の中頃)は、語構成という用語には国語学国文学の文献でお目にかかることすら稀で、複合語や接頭辞・接尾辞のことが、西洋文法にならって、文法書にほんの少しばかり述べられている程度のことであった。もちろん、すでに松下大三郎氏(『改撰標準日本文法』昭和五年版)の原辞の論をはじめ、三矢重松・小林好日・徳田浄といった人々にこの方面の論がなかったわけではないし、殊に安藤正次氏は著書『古代国語の研究』(大正十三年刊)や『国語学通考』(昭和六年刊)などで、この問題に対する興味ふかいアプローチを示されていた。しかし、これらの人々の論は、当時の学界では、まだ、一部の注意をひくものでしかなかったようだ。山田孝雄氏が『日本文法学概論』(昭和十一年刊)に、「語の運用の研究」という部門を新しく設けて、語の複合・派生・転用などのことをまとめて述べられているのだが、これを受けて更に発展させる論は一向に現れていなかった。

いわゆる文法論では直接に文を構成する要素としての「単語」以上を扱うのであって、語以下の構成要素は余り問題

にしないというのが一般であった。さりとて、語そのものを直接の対象とする研究、すなわち語彙論は、この当時、まだまだ未開発というべき段階にあった。そういう学界の状況を、やや離れたところから大観しつつ将来を展望しておられた大谷大学の亀田次郎先生に相談したら、あるいは賛成してもらえるかと、一日お宅に参上したところが、先生もまた、「それはむつかしいなァ」と否定的であった。理由は、日本語のように系統関係の明らかでない言語では、十分な比較研究ができないのだから、第一、語根からして確定しにくい。語構成の研究などは無理だろう、という御意見である。すなわち、先生もまた、語構成といえば、まず歴史的に遡って、日本語の始源の形に迫るようなものを考えられたわけで、これはその頃の空気では、むしろ当然のことであったろう。

学界一般のこういう状況のなかで、しかもまだ駆け出しの若造が、十分な基礎も持たずに、こんな問題に手を出すなどということは、あぶなっかしくて見ていられない、と諸先輩が感じられたのは、きわめて尤なことである。ただ、その頃の私の幼い頭で漠然と考えていたのは、次のようなことであった。まず、「ことば」を直接の問題にしてみたい。しかし、音韻論は、扱い方がどうも機械的で味気ないという感じがする(と、その当時は思った)。文法論も、既にできあがった表現(＝文)を集めて、その構造に関する通則的事象を結果的に説明するだけで、いわば死体を解剖しているような空しさを禁じ得ない。何とか、「ことば」が新しい表現を創出して行く、その経緯やら生態やらを、もっとじかに問題にするというような行き方はできないものだろうか。その意味で、当時ようやく学界が関心を示しだした小林英夫・波多野完治といった人々の文体論の考え方に大いに興味を惹かれたのだが、文あるいは文章の創出過程に関して注がれているそのような眼を、また、語の創出ということに関して向けてみたらどうなるだろうか。複合とか派生とかの方法によって造り出される語の一つ一つは、まさに、新しい表現の創出を意味すると考えられる。古代には古代の、中世には中世の、そして現代には現代の、新しい造語がつぎつぎに生れてきたわけである。その一つ一つに、これを生んだ時代の人々の語構成の意識が看取されるだろう。既存の合成語の構造を思い違いして、その本来からいえば誤った分

析（いわゆる「異分析」）を施した結果に基づいて生れてきた新造語もあれば、また、とんでもない類推をはたらかして生み出した語もあるはずである。狭い意味での論理を超えた、そういう自由な造語者の心のはたらきを、個々の造語の背後にたどり見ることは、なかなかに困難ではあるけれども、しかし、そこにこそ人間のいとなみとしての「ことば」というものの実態が、あらわに窺えるのではないか。それを何とかして追求してみたい——と、まあ大体そんなことを考えていた。

まこと、盲蛇に怖じざる、空想的な志向と言うべきだろう。想像をたくましくして独り楽しむ分には問題はなかろうが、いやしくも、これを論文というかたちに纒めるためには、事実に裏づけられた一貫した論理を以て、大方の納得の得られる結論を導き出さなくてはならない。それが、この種の問題においては如何に困難であるかは、実際に作業を進めれば進めるほど、ますます明らかになってくる。そのことへの不安と、もどかしさとに明け暮れた日々のことは、今なお切実に想い起されるのだが、そういう苦しみの中で、一筋の光明を見る思いがしたのは、次の二人の先達のことばであった。一つは、折口信夫氏の『古代研究・民俗学篇』（昭和五年刊）の「追い書き」に見える、

だが、強情な私はまだ、思うてゐる。我々の立てる蓋然は、我々の偶感ではない。唯、證明の手段を尽さない発表であるに過ぎない。世の論證法にも、一種の技巧に過ぎない場合が多い。（中略）つまりは、蓋然を必然化するだけの事である。而も、その必然化せられたと見える研究にすら、認識の不徹底が煩ひして、結論を誤らしめてゐる事が多い。（中略）だから、立證すべき信念と、その土台となる知識の準備を信頼してよい学者の立てた仮説なら、その解釈や論理に錯誤のない限りは、民俗学上に存在の価値を許してよいと思ふ。これを更に必然化する事は、論者自身或は後生学者の手でやられてもよいはずである。

という文章である。むろん、これは、民俗学の研究について言われているのであるし、また広い知見と鋭い直観とを兼ね備えた折口さんだから言えることばであって、私などがそのまま口真似できることではないのだが、しかし、氏の言

われる「哲学と科学との間に、別に実感と事象との融合に立脚する新実証学風があるはずである」ということばに、私は、一つの頼り所を見出す思いがした。そもそも、言語や文学を対象とする研究において提出される結論なるものは、すべてその限りにおいての結論なのであって、つまりは一つの仮説なのではないか。そう考えると、少し気が楽になった。

そして、いま一つは、更に直接に言語に関することとして、泉井久之助先生が、『言語の構造』（昭和十四年刊。のち『言語構造論』と改名）に記された、

如何に周到にして博大な用意を以つてしても常に大いなる――しかも多くの場合重大なる――剰余を残すのが、この種の問題の一般的な性質だからである。実に困難なのは、この種の考察の体系的完成を求めることである。如何に周密な体系を構成しても、言語自らは、常に体系以上に博大であると共に、また以上に細緻であることを示して来た。

ということばである。割り切れないのが本当であって、割り切れすぎるのは却って言語の真実から遠ざかっているのではないか、とそういう意味にこのことばを理解して、私は、まさにその「割り切れなさ」の一つの典型のような語構成という問題をテーマに選択してしまった自分を慰めるとともに、また、「やはりこれでよかったのだ」という、一種自己満足に似た気持を味ったことであった。

その頃から約五十年、勉めれば勉めるほどいよいよ埒の明かなくなるこの問題を前に、手をこまぬいて嘆息しながら、しかもなお、これと手を切るどころか却ってますます深入りして今日に至ったのは、卒業論文に悪戦苦闘した苦い初恋の想い出が、今日なお胸の底にくすぶり続けているからであろうか。

以上ながながと、くだらぬ回想を「まえがき」として記したのは、「接尾語の一考察」と題して提出した卒業論文と同種のテーマの文章を、あいも変らず今またここに記そうとすることへの、いわば言い訳としてである。

(二) グチとグチラ

「お菓子を箱ぐち持っといで」「お金を財布ぐち落した」「雑草は根ぐち抜いてしまおう」「まるぐち頬張る」のように用いる「ぐち」という接尾語がある。名詞に接して、「そのものを含めて、そっくり」の意味を表わすもので、共通語の「(箱)ごと」「(まる)ごと」「(根)ぐるみ」などの言い方に相当する。大阪・京都をはじめ、栃木県塩谷郡喜連川・愛知県知多郡・三重県阿山郡・滋賀県彦根・奈良県吉野郡及び対馬に行われているという記録があって、近畿のみならず東西にかなりの拡がりを持つ俚言らしい。歴史的にどこまで遡れるかは正確に言えないが、たとえば『浪花聞書』(『浪花方言』)に、

ぐち　菓物抔皮共食ふをかわぐちくふと云

として掲げている(『増補俚言集覧』も「大阪詞」としてこれを引く)ことからも、近世から上方方言として注意されていたことは明らかである。近松門左衛門にも、『近松語彙』に引く、

奥を覗き表を見、箱ぐち取って持上れば、ふるうてどうど打落し、　(『心中二枚絵草紙』)

あたご粽も皮を取らねば旨味は知れぬ……どうもならぬ粽様いつそ皮ぐち賞翫と、　(『本朝三国志』)

という二例をはじめ、いくつもの用例が見える。その他、元禄・享保の頃に京・大阪で広く用いられていたことは、

大事のひぶつなれどハテお望みの上からは堂ぐちかいてきて、ゐながらおがませ申べし。
(浄瑠璃『自然居士』。作者不明だが元禄三年上演)

京にては入物ぐち根ぐちなどといふを、但馬の方にては入物ほうど根ほうどと言へり。　(『男重宝記』)

焼たての蒲鉾に生醤油つけて板ぐちかぶり、　(江島其磧『世間娘気質』)

等々の例からも察しられるであろう。

ところで、名詞に接して、「そのものを含めて」「そのものといっしょに」の意味を表わす接尾語には、右のグチ・ゴト・グルミなどのほかに、なお、グルメ(グルマ・ゴロミ)・ゴメ・マズラ(マジラ・モジラ)・トメ・ママ・ナガラ・サシラ(サラ)・マシ等々さまざまの俚言が各地にある。それらには、むろん過去の文献に見えるものも多いが、そのうち、たとえばグルミ・グルメは動詞「くるむ」「くるめる」に、ゴメは動詞「込める」に、マジラは動詞「交じる」あるいは「交ぜる」に、またママ・ナガラは助詞「まま」「ながら」に、それぞれ関係がつけられそうである。そういう、動詞などに由来することの推定されるものも多い反面、この種の接尾語には、たとえばサシラとかマシとかのように、その成立の由来の簡単には辿り得ないものが、いくつかある。ここに問題にしようとするグチもまた、そういう接尾語の一つということになる。

ここに注意されるのは、このグチと同じ意味用法を持つグチラという接尾語が新潟県中頸城郡にあって、「入れ物グチラ持ってこい」のように用いられているということである(『頸城方言集』)。一方また、同じ意味・用法を持つ接尾語として、愛知県や徳島県美馬郡に、「風呂敷ゴテあげる」のように用いる、ゴテというのがあって、それが石川県石川郡・福井県敦賀では、「密柑を皮ゴテラ食べる」のようにゴテラという形で用いられるという事実がある。すでに『文政句帖』七年八月にも「花ごてら。。。鋏れにけり花木槿」の句が見えるが、この「ゴテ―ゴテラ」の一対と、「グチ―グチラ」の一対とは明らかに平行する関係にあり、グチとゴテは互に母音の交替しあった形と思われる。グとゴとの交替については、右のグチがまたグシの形をとる場合があるが(福島・茨城・奈良吉野郡・対馬)、そのグシがまたゴシの形をとる方言(奈良・大阪・和歌山・愛媛県宇和島・高知)もあることを考え合わせることができる。出羽方言として記録されているゴチラの形は、まさに両者をつなぐものとも言えよう。そして、また、このゴテラの第二音節が母音交替したものとして考えられるのが、新潟県中魚沼郡において「財布ゴトラ盗まいた」のように用いられるゴトラの形である。

当然「財布ゴト」との関係が想定されるものである。

このようにして各方言を探って、グチーグチラ、ゴテーゴテラ、ゴトーゴトラという、同じ意味用法を持つ接尾語の相互関係を見るとき、現代共通語における「丸ごと」のゴト、京阪方言その他における「丸ぐち」のグチは、それぞれこのゴトラやグチラに遡り、その語末のラの脱落した形として考えることができようと思われる。

(三) 「かてり」から「がてら」へ

それならば、このグチラ・ゴテラ・ゴチラ・ゴトラなどの形は、更に遡ってどのような原形から分れ出たものと考えられるだろうか。

思いあわされるものに、静岡県や対馬で行われるガツラという接尾語がある。「歩きガツラ考える」「食事しガツラ本を読む」のように動詞の連用形に接して、ある動作をしつつ、それと同時に(併せて)いま一つの動作をする意味を表わす場合に用いられる。すなわち、「歩きナガラ考える」とか、「食事しモッテ本を読む」(近畿・中国・四国)とか、「めしを食いシナ本を読む」(新潟・福井・長野・山梨・岐阜)とかと同じように、動作の同時進行を言う言い方である。(因みに、この「ながら」や「もって・もて」の用法は古代語以来のものであり、「しな」もまた近世以来の用例がある)。ある一つの動作に他の動作を交じえて行う、あるいは、二つの動作を交ぜ合わせ搗き込めるようにして行うというのが、この言い方の原義であったとすると、このカツはもと、たとえば『色葉字類抄』や『観智院本名義抄』に「搗カツ」と見えている、「臼などで、つく」意味の動詞ではなかったかとも思われる。壱岐、対馬などで、「加える」の意をカッツルと言うことなども参考になろう。先に見た、名詞につく接尾語のマズラ(あるいはマジラ)が、動詞「交ず」に語尾語「ら」を添えたものと考えられるならば、これもまた右の「搗つ」に「ら」を添えたものとすることができそ

うである。ガツラと語頭が濁音であるのは、他にも例があるように、これが接辞化して連濁した結果と見られよう。

しかしながら、カツの意味や、ラの接続のしかたにやや無理の感じられる右のような考え方に対して、もっと可能性の高いのは、このガツラが、「がてら」の変化した形ではないかという考え方である。「がてら」もまた、「散歩(し)がてら煙草を買いに行く」のように、動作の同時進行を言うものであることは、言うまでもない。

現代の共通語として用いられるこの「がてら」という語の歴史は古く、既に『万葉集』にその用例が見える。すなわち、

(1) ……吾妹子が　形見我底良と　紅の　八入に染めて　おこせたる　衣の裾も　とほりて濡れぬ　(四一五六)

(2) 梅の花咲き散る苑にわれ行かむ君が使をかた待ち我底良　(四〇四一)

という二例で、(1)は天平勝宝二年(七五〇)の作であり、(2)は、天平二十年(七四八)三月二十三日に家持がその館で宴を催したときの田辺福麻呂の作で、「ここに新しき歌を作り、併せてすなはち古詠を誦し、おのもおのも心緒を述ぶ」という題詞のある一連の歌の中の一首である。その「古詠」というのは、巻十に、

(3)梅の花咲き散る苑にわれ行かむ君が使をかた待ち香花光(一九〇〇)

として出ている歌のことで、これは第五句が「かた待ち香花光」となっているが、これは恐らく「かた待ちかてり」と読むべきものと思われる。それは、他に、なお三首、

(4) 吾が舟は沖ゆな離り迎へ舟かた待ち香光浦ゆ榜ぎ会はむ(一二〇〇)

(5) 雨降らずとの曇る夜のぬるぬると恋ひつつをりき君待ち香光(三七〇)

(6) 能登の海に釣する海人の漁火の光にいませ月待ち香光(三一六九)

という「待ち」にこの語の接した類似の表現をもつ歌があり、かつまた、先のガテラと、このカテリとをつなぐものとして、

(7)　秋の田の穂向き見我氐里わがせこがふさ手折りける女郎花かも(三九四三　天平十八年作)

(8)　山辺の御井を見我豆利神風の伊勢処女ども相見つるかも(八一　和銅五年―七一二―作)

の二首に見えるガテリという形があるからである。作歌の時代から言うと、年代不明の(3)(4)(5)(6)が最も古く、ついで(7)(8)がやや新しく、(1)(2)が更に新しいこと、右に見る通りである。すなわち、もしこれらが同一の語の変化形とすれば、歌の年代から見ても、ガテラはガテリに遡り、ガテリは更にカテリに遡るものと考えることができそうである。天平二十年という時点において、すでにカテリは古い語となり、ガテラが専ら用いられるようになっていたために、福麻呂は(3)のカテリを(2)のようにガテラと詠み変えたのであろう。

カテリ→ガテリ→ガテラの三語は、こうして、もと同一の語の変化した形であり、基本的には相似た意味・機能を持つものと考えられそうであるが、しかし、一方またその形態の変化に応じて、当然相違する面がその間にある。まずカテリを伴う句は、右の(3)(5)(6)では、何れも第五句にあって、一つの叙述をなしている。すなわち、(3)は、「梅の花の咲き散る苑に私はまいりましょう。あなたからのお使いを、ひたすらに待とうと」、(5)は、「雨も降らず、べた曇りの夜のようにすっきりしない思いで、あなたに恋い焦れておりました。一方では、あなたのお越しを待って(いたのです)」(6)は、「能登の海で夜釣りをする海人のいさり火を頼りにいらっしゃいませ。月の出るのを待ちながら」の意味である。現代語の「Aしがてら Bする」の言い方では、「Bする」ことが主で、「Aする」ことは、それに対して副次的に軽く述べられることになるのに対して、右の「かてり」を用いた表現では、これを伴う叙述が、上の叙述に対して少くとも同等の重さ、あるいは、むしろ、内容的により中心的なこととして述べられている、という違いがある。

これは、(4)のように「かてり」を伴う句が独立の叙述でなく副詞的修飾句として用いられた場合にも、なお感じられるのであって、(4)は、「われわれの舟は沖の方へ遥ぎ離れないでくれ、迎え舟をひたすらにまって岸辺を漕いで行って、それと出会いたいから」の意である。同様なことは、これが「がてり」の形になって、副詞的修飾語句を形成している

(7)(8)の場合にも、なお認められる。すなわち(7)は、「秋の田の稔りの状態を見に行って、(その際、併せて)あなたがこんなに沢山手折ってくださった、みごとな女郎花だこと」、(8)は、「山辺の御井を見に来て、(同時に)計らずも伊勢乙女たちに会うことができたことだ」の意味であって、「秋の田の穂向きを見」たり「山辺の御井を見」たりすることは、決してついでにしたことではなくて、むしろこちらが主目的であったはずなのである。

このように見てくると、「かてり」「がてり」というのは、既にこの頃、やや形式化して慣用句的になっていたことが想像されるとはいえ、本来は、Aの動作とBの動作とを兼ねて(併せて)行うということを、少くとも同等の重さで述べるものであったと考えられる。

(四) 「がてら」からグチへ

しからば、この語の構成はどのようなものであったかと言えば、本来これは、「混ぜ合わす」「つき込める」の意味を持つ「かつ」という動詞から派生されたものであろう。古く、この語は、書紀の古訓に「交(カテ)レ薪、焼於竈」(『岩崎本推古紀』)、また、『観智院本名義抄』に「雑 マジフ カツ」、『色葉字類抄』に「和 カツ 交也」などと、「交・雑・和」などの字の訓として見えており、例の『万葉集』三八九二の歌の「醤酢に蒜搗き合て鯛願ふ」の「合」も、従来カテテと訓まれてきた。現代語にも、「かてて加えて」という慣用句が残っているが、方言では、カテルの形で、

加える　津軽・群馬・神奈川・静岡・長野・岐阜・大分・長崎・熊本・壱岐

仲間に入れる　北海道・青森・岩手・秋田・群馬・埼玉・神奈川・静岡・伊豆大島・山梨・長野・愛知・新潟・福井・大分・対馬

まぜ合わせる　新潟(西頸城郡)

副食物として食う　青森・秋田・宮崎

などの意味で、ほとんど全国的に用いられている。副食物をカテという方言も全国的に見られるが、これの名詞形である。

この「交ぜ合わす」の意味の動詞「かつ」が補助動詞的に用いられると、たとえば「待ちかつ」というのは、「待ち交ぜる」ということで、「待つことを併せてする」すなわち「併せて(同時に)待つ」の意味になる。あたかも、「読み合わせる」が「読むことを合わせてする」すなわち「合わせて(＝いっしょに)読む」の意味になり、「書きつづける」が「つづけて書く」の意味になるのと一般である。

このような「～かつ」の段階がまずあって、それに更に「り」の添わった形が「～かてり」であったと考えられる。この「り」は、文法でいわゆる完了の助動詞とされるのと同一のもので、したがって四段活用(已然形)とサ行変格活用の未然形にしか接続しないと言われる。しかるに、右の「かつ」は下二段活用であって、これに完了の「り」は接続しないということになりそうである。ところで、この「り」を完了の助動詞と説くのは、一つの便宜的な説明法であって、本来これは、動詞連用形にアリが接続して、たとえば、yuki+ari>yukeri, si+ari>seriのようにして成立した「行けり」「せり」の形を、たまたま、この動詞に「行け」「せ」という活用形があるところから、それに「り」が接続したものとして説くに過ぎない。だから、特殊仮名遣から見て、この「行け」の形は、已然形ではなく実は命令形であると言い改めなければならなくなっている。命令形に接続する助動詞というのは、他に例がないし、理論的にもそれはおかしいのである。この「り」は、むしろ完了・継続の意を含む動詞を造る接尾語と言った方が適当なもので、したがって、四段・サ変以外の動詞に接した例も、古代以来、「着る」(『万葉』、三六六七)、「来れば」(『萬葉』、三九五七)「うな懸けりて」(『記』、上)、「魚のそこねただれる」(『享和本新撰字鏡』)、「たな暮れり」(『天治本新撰字鏡』)「海ならずたたへる水」(『新古今』)「敷満てり」(『延慶本平家』)のように、いくつも見出すことができる。右の下二段活用動詞に

「り」が接尾した形をとる「～かてり」もまた、その一例なのである。

このように、もと、「併せて～した(している)」という意の叙述に用いられていた「～かてり」という形式は、前述のように次第に修飾句に用いられるようになるとともに、より結合形式的性質を強くして、「がてり」という語頭に濁音を持つ形となり、更に副詞句を形成する機能をより強くしたとき、それに応じて語形もまた、語尾にa母音を持つ、私の「情態言」と呼ぶ形に転じてきた。それが、「がてら」の形であったと思われる。したがって、前掲の(2)の歌は、(3)を詠み変えたものであるけれども、こうなると、末句は、「君の使いをかた待ちかたがた」くらいの意味で、やや軽く表現されることになるし、(1)も、「形見の意味をもこめて送ってよこした」というほどの意味に解されるであろう。

「がてら」を伴う句の副詞的修飾語としての性格は、こうして次第にはっきりしてきたと思われるが、しかし、それでもなお、次代の『古今集』に見えるこの形式を含む四首の歌、

(9) ありぬやと心みがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ恋しき(一〇二五　読人しらず)

(10) いとはるゝわが身は春の駒なれや野飼ひがてらに放ちすてつる(一〇四五　読人しらず)

(11) なき恋ふる涙に袖のそほちなば脱ぎかへがてら衣こそは着め　(六五五　橘　清樹)

(12) わが宿の花見がてらにくる人は散りなむのちぞ恋しかるべき　(六七　大河内躬恒)

のうち、(10)や(11)の場合は、なお、「がてら」を伴う句の意味が、単に「～のついでに」というよりは重く感じられる。それが(9)や(12)においては、ほぼ現代の「がてら」に近いものになっていると言えるだろう。

ところで注意されるのは、先の(1)や、この(10)(12)などでは、「がてら」が助詞の「と」や「に」を伴っていることである。一体、情態言というのは、本来、体言的性格のものであるが、副詞なるものは、基本的に体言の性格を持つものであり、副助詞の「くらい」「だけ」「ばかり」「ほど」「まま」なども何れも名詞由来のものであることや、また、かのク語法と呼ばれる体言(言はく、思はく等)が副詞的に機能することなどからも考えられるように、この「がてら」という

情態言の形は、それ自体で副詞的に機能し得たのである。「と」や「に」は、その副詞的機能を更に確かにするために添えられるに過ぎないと思われる。その点は、同じような言い方の、

骨加天尓つくれる肉醤（『享和本新撰字鏡』）

神無月しぐればかりは降らずして雪がてにさへなどかなるらん（『後撰集』四五一）

吾が宿の花橘を花其米尓玉にぞ吾が貫く待たば苦しみ（『万葉集』三九九八）

などの「がて」や「ごめ」が、やはり動詞「かつ」や「こむ」の居体言（連用形名詞）に由来する接尾語であるけれども、常に「に」を伴って用いられるのと相違する点である。

ところで、右の「がて」「ごめ」という接尾語は常に名詞に接して、「～ぐるみ」の意味を表わした。「がてら」は、(1)の「片見がてら」のような例もあるけれども、多くは動詞に接尾していると見られる。もっとも、その動詞連用形は実は居体言とも見られるもので、厳密には区別のつけにくい場合が多い。現代語には、「散歩がてら」のように、形の上からはっきり名詞に接続するものがあるが、その名詞は多く動作的意味を含んだものである。その成立の由来から考えても、「がてら」は本来、動詞に接尾するものであろう。しかしながら、たとえば、同じような意味・機能をもつ「ながら」という接尾語は、「歩きながら考える」のように動詞に接すると同時に、また「皮ながら食べる」のように名詞に接尾して、「皮ごと」の意味を表わす方言（佐賀県藤波郡）がある。同様の関係をもって、この「がてら」の変形であるグチラ・ゴテラ・ゴトラ（前述のガツラも、あるいはこれの変化した形と見るべきか）にも、前述のように名詞に接尾して、「～を併せて」「～と共に」の意を表す用法が生じたものと考えられる。そして、その語末のラの脱落したものが、すなわち共通語のゴトであり、近畿方言などのグチなのである。ラの脱落が起ったのは、これが名詞に接尾するものになったことと関係があるのかもしれない。しかし、ラが脱落してもなお、この語は、語末にラを有していた頃に発揮したのと同じ副詞的機能を、助詞「に」を伴うことなく自身単独で発揮し続けているのである。